

収蔵資料一例

生活・道具



写真機

〔1870年(明治3)〕

初期のカメラはこんなに大きい

写真技術は1848年にオランダから渡来了。そして1857年頃伝わったコロディオ・プロセス(湿板写真)により、本格的に普及する。幕末には職業写真家も複数現れ、江戸・横浜・長崎に写真館を開業している。資料は旧江戸城などを撮影した写真師横山松三郎のもの。



石油ランプ

〔1882-92年(明治15-25)頃〕

ランプで部屋が少し明るく

石油は江戸以前から日本でもわずかに使われていたが、本格的な採掘・利用が始まるのは明治時代に入ってから。石油を使うランプも明治に入り輸入されるようになり、従来のろうそくや菜種油の灯りよりはるかに明るいその光は、日本人の夜の暮らしを大きく変えていった。



ガワーベル電話機

〔1890年(明治23)〕

最初の電話はどう掛ける？

グラハム・ベルによる電話の発明から14年後の明治23年、日本初の電話サービスが東京・横浜間で開始した。ガワーベル電話機は開始当初に使用されたもので、送話機を開発したイギリスのガワーとベルの名から名付けられた。中央のボタンで電話局を呼び出し通話した。



手動式扇風機

〔19世紀〕

発明も涼をもとめて

現代の電気扇風機の先祖、手回し扇風機。団扇4枚を羽にして、後方の取っ手を回して回転させ、風を生み出す仕掛け。本体部分には蒔絵が施されており、高級インテリアといった面持ちだ。



手動式ミシン

〔1892年(明治25)〕

ミシンで服を工場生産

ミシンは1854年にペリー艦隊が再来航した時の献上品ではじめて日本に持ち込まれた。明治に入り軍服の大量生産などの需要が生じ、舶来のミシンが本格的に使用されるようになる。国産品は明治14年の第2回内国勲業博覧会で展示されたが、量産化は大正時代以降となる。



蝋管式蓄音機

〔明治中～後期〕

録音・再生どちらも可能

エジソンが音を記録再生する機械を発明したのは1877年のこと。日本には翌年持ち込まれ、外国人により実験公開が行われた。当時は蝋管と呼ばれる円筒形の媒体に録音していた。明治30年代に入ると各地で蓄音機を見せる興行が行われ、機械が発する音を人々は驚き楽しんだ。



フォードT型 ツーリングカー

〔1925年(昭和1)〕

人力馬力からガソリン駆動へ

日本に初めて自動車を持ち込まれたのは明治29年頃といわれ、明治34年には早くも銀座に自動車販売店が開業している。明治40年には自動車に関する法律も制定され、免許やナンバープレートの制度も始まる。フォードT型は明治41年から販売されたフォード社の人気モデル。



浅葱絹地鶴松に波模様丸に楓紋付袷

〔江戸末期〕

チラ見せが粋だよね

18世紀以降の町人の女性の着物では、裾周辺のみ配した裾模様が一般的だった。また、着物の裾が翻った時にのみ模様が見える裏模様も、「粋」だとして持て囃された。

食



羽釜付ガスかまど

〔1910年(明治43)〕

ガスは灯りから熱源へ

ガスが登場した当初は灯りとしての利用が主だったが、電灯の普及により熱源としての用途が目された。ガスかまどは、日本の生活に合わせて開発された最初のカス調理器具。普及により、それまで調理に必要だった火起こしなどの家事労働が減り、台所も衛生的になった。



金唐革弁当簞 (弁当箱)

〔江戸後期〕

高級弁当簞で優雅なひと時を

外側は竹編みの上に金唐革を、内張りは更紗を貼る弁当簞。金唐革は金泥で文様を表した輸入品の革で、日本では装身具として用いた。更紗もヨーロッパ渡りの舶来物。江戸中期頃には庶民にも花見の文化が広まり、富裕な人々は本資料のような弁当簞を携行した。



二八そば

〔1859年(安政6)2月〕

いつでもどこでも蕎麦

蕎麦は店舗のほか、肩にかついで移動する屋台でも提供された。夜間に街頭で売られる夜鷹蕎麦もあり、昼夜問わず気軽に食べることができた。

人(仕事)



江戸の花子遊び 五番組こ組

〔1859年(安政6)12月〕

総勢1万人を超える町火消

たびたび火事に見舞われた江戸。消防にあたったのは火消たちだ。町人による町火消には、隅田川以西の江戸の町を47に分け、いろは47文字を名とした47組があった。



高島おひさ

〔1793年(寛政5)頃〕

会いにいけるアイドル

水茶屋は湯茶を提供した休憩所。水茶屋で働く看板娘が店の人気を高めたり、これを目当てに訪れる客も少なくなかった。浮世絵師喜多川歌麿は看板娘を錦絵に描いて評判をよんだ。これは歌麿による両国の水茶屋の看板娘おひさ。



俳優見立夏商人「水売り」

〔19世紀〕

ひんやりスイーツのデリバリー

水売りは、白砂糖と白玉団子を入れた冷水を「ひゃっこい、ひゃっこい」と言って売り歩いた。この絵は人気の歌舞伎役者が夏の商売人に扮するシリーズ。水売りは夏の風物詩だった。

お金



銭繒 (百文さし)

〔不明〕

縄紐が財布がわり

江戸のお金には金貨、銀貨、銭貨、三種類の貨幣があり、庶民はもっぱら銭貨を使った。1枚1文の銭96枚を縄に通して100文とする習慣があった。この縄紐を売り歩く銭縄売りという商売もあった。

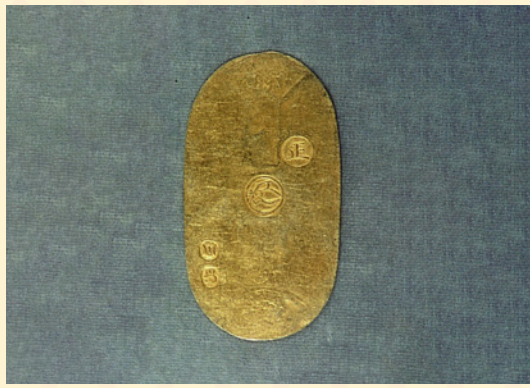


文政小判

〔文政2-11年(1819-1828)〕

実は庶民にゃ高嶺の花

江戸時代は基本的に金・銀・銭の3種の貨幣が使用された。相場は日々変わるが、1両はおよそ4000文前後で、現代の価格に換算すると10万円程。1819年の改鋳に伴い発行されたこの小判は、裏面に草書で「文」とあるため、草文小判と呼ばれる。



慶長小判

〔1601年(慶長6)以降〕

大名屋敷専門の大泥棒 鼠小僧

鼠小僧こと次郎吉は、大名屋敷だけを狙っておよそ100回も盗みを働いた大泥棒。江戸中引廻しのうえ獄門となった。両国の回向院に墓がある。当時から伝説に彩られ、後には芝居に講談に、大活躍する。



寛永通宝

〔寛文8年(1668)以降〕

2つの寛永通宝

庶民は日常の取引では銭を用いた。現代の価値に換算すると、1文は25円程度。寛永通宝には1文銭と4文銭があり、大きさや裏面が異なった。96文で100文とする慣例があり、銭1貫は960文だった。

えどはくの約35万点の収蔵資料が検索できる!!

江戸東京博物館
デジタルアーカイブはこちら